

母校を想う

二二回生 黒川 高秀

防空ズキンをつけ、上級生に連れられて、あの道を走った印象を今も鮮明に持っている年代の最後が私達であろう。二年生の秋からの社会の変化を実感できる世代の、多少の例外はあるが、やはり最も若い者共であるに違いない。最初からいわゆる新教育を受けた人々とはその点で異なり、むしろ、四・五年先輩の方々の殿をつとめる位置にあると思う。

母校の思い出は、建設のはつらつとした雰囲気、それに尽きる。それは当時の日本の小学校の圧倒的に覆った潮であろう。しかし、私達には千里山の土地柄の要素を見逃せないと思われる。都会に近いにもかかわらず、殆ど戦災を蒙らなかつた母校にあっては、復興でも再建でもなく、正に新しい出発そのものであつたに違いない。先生方の新しいカリキュラムを私達は、直ちにまともに受けたのであつた。給食はまずかつた。六十人に及ぶ大クラスには、

いかにも教室が狭かつた。設備といい、器具といい、運動の道具といい、条件は底をついていた。しかし、先生方から受けた若々しい希望のいぶきがあつた。自由の、発展の、希望の新鮮な喜びがあつた。

それこそ、年を経るに従つて体験し難いものとなり、その故に母校を忘れ得ぬものとしてゐる。全てが「試み」の、可能性豊かな時期でもあつたのであろう。

いささかの情況の羅列をお赦しいただきたい。運動場の西南の崖のうえにあつた小さな池を、職業家庭科の時間にモッコをかついで埋めたのは私達であつた。現在の鉄筋校舎のあるあたり一帯の水面を運動場にする。という遠大な計画に納得したのであつた。今も母校の北面に残るサクが出来、ペンキを塗つたのが私達であつた。木造の新しい小さな校舎が完成したのも私達の頃であつた。アメリカ人の、生徒自治会についての奇妙な説明を聞いたのは四年生の時であつた。高度の音楽と美術の力を与えられたのは、私達が最初ではなかつたか。

あれから十年、既に池もなく、柵も古い。にも増して、私達の年代にして数名の学友を失つてゐる。

亡くなられた先生、その後を遂に仄聞すらしない。去られた先生方は、言うに及ばず、離れて想う母校は胸に熱い。

一方、社会及び教育の変貌と膠着が言われてすでに久しい。

松を切拓いた新校舎の威容。それを、この地にある幼い生命の躍動を知つた者の、新しい仕事の象徴ととりたたい。

追記

黒川さんがこの記念誌に寄稿されたのは、昭和三四年ですから、ご本人は未だ東大医学部の学生だつた頃です。

この千二小・三十周年記念誌には卒業生として黒川さんの他に、

二回生 逢坂 博子様、三回生 六角 明子様、

(千里山会誌 第三号に転載済み)

五回生 大塚 素光様、八回生 武田 卓様

一一回生 相馬 徳三様、一八回生 大内 祥子様

一八回生 三輪 なつ子様、二一回生 口羽 勉様

二四回生 山本 栄美子様 が寄稿されています。